

序

職業訓練の受講を希望する求職者に対して職種選定に適切なアドバイスを与えることができるようにするため、当センターでは、本年度プロジェクト研究の一つとして職業適応性検査の開発に取り組んでいる。

適性判定のテストとして適性検査があり、公共職業安定所を中心に広く普及していることは周知のとおりであるが、現実には、訓練受講希望者の適職診断にこのテストがあまり活用されていないように見受けられるのは何故か。本報は、職業安定所の担当者、訓練校指導員および訓練生の三者が、個人の適性および適性診断のための検査のありように対してどのように考えているかを聴取方式で調査した結果をとりまとめたものである。短かい調査期間に、ごく限られた対象者に対して行った調査であり、本報から結論めいたことを引き出すことには慎重でなければならないが、訓練受講者の適応性診断に対する関係者の関心は低いといわざるを得ない。今後、本格的な高齢化社会を迎え、技術革新による技能の陳腐化と相まって中高年になってからの転職が増大することは避けられないであろう。この人びとが能力再開発によって新しい職種に転換を希望するとき、必要な診断情報を提供するためのシステムづくりは急務である。本報が、その開発の方向を発見するための手がかりとして貴重な一歩になることを期待したい。

本報の研究は、当センター客員研究員 佐藤信弘氏が担当した。関係者から忌憚のない御意見を賜われれば幸である。

昭和57年8月

基礎研究部長

泉 輝 孝

はじめに

誰もが自分にあった職業につきたいと願うのはごく自然のことである。しかしながら、この職業の選択については家庭も社会でもきわめて不十分にしか指導したり教えたりしてはいないようである。

そのためであろうか。職業への道を求めて、職業訓練校に入校しようとする人達の場合も職業についての心構えや理解が不十分のままその職業が自分に向いているか、どうかも考えず職業生活に入ろうとする人が少ない。

これは、私のささやかな経験に照しても、まぎれもない事実なのである。

そこで、まず職業訓練校の入校選考時に行なわれている「一般職業適性検査」(労働省によって作成され、広く一般によく使われている。以下、単に適性検査または労検という)がどのように利用されているのか、具体的にはそれが入校志願者の職業選択上にどのような影響を与えているのか、これを職業安定所の職業相談を担当し、求職者に適合した職業を紹介する業務にたずさわる方々、訓練校で訓練を担当する指導員の方々、現に職業訓練を受講している訓練生の三者の生の声をとおして検討を加えてみたい。これによって入校選考時における選考と適応性診断の問題点をさぐり、その解明の手がかりを求めたいと意図したのが、この調査なのである。

この中には幾つかの所見があるが、これは今後の調査研究の方向とその手がかりを得ようとするもので、いわば作業仮説ともいうべきもので結論ではない。これを予めお断りしておきたい。

なお、指導員と訓練生の発言はできるだけ、そのままの言葉で記載したので、ご判読を特にお願したい。

この調査は4部で構成し、第1部は普通訓練課程と職業転換課程をもつ某高等職業訓練校(以下、単に訓練校または校という)で入校選考時の適性検査がどのように活用されているのか、またどのような位置づけをされ、選考の場面では適性評価はどんな参画の仕方をしているかの調査である。

第2部は面接調査である。訓練職種を選択について、どんな考え方で適性検査に接しているかを、訓練生、訓練を担当している指導員、職業安定所の職業相談の担当者といった3群からの調査である。

第3部は調査にもとづく所見と提言である。

最後の第4部は面接調査の結果を資料として整理したものである。

この調査には職業安定所の職業相談担当の方々、職業訓練校の多数の指導員の方々、また大勢の訓練生の人達に多大のご協力を賜わった。また、調査のとりまとめ

には当センター基礎研究部長、泉 輝孝先生に多くのご指導と示唆を賜わり、加えて当センター訓練適応研究室の七尾和之先生からは適性検査の心理的要素について数々のご教示をいただいた。茲に厚くお礼を申し上げる次第である。